

舞踊譜の理念と実際

西川箕乃助

日本舞踊では西洋バレエや*Contemporary dance*のように、舞踊譜というものが確立されていないというのが現状です。ですから舞踊家それぞれが使い勝手のよいように、個人的に色々な工夫をするという形式で、これが江戸時代以来、現代まで続いてきたという状態です。従って、舞踊作品を次の世代に伝え、後世に残すということを考えた場合、今後ある意味で、舞踊譜というものが不変的なものとして不可欠ではなからうかと、私個人としては考えています。

周知の通り、舞踊とは瞬間に消えてしまう性質の芸術であることから、これを後世に伝えるべく努力はこれまでにのみならず、幾つかの舞踊譜が生まれました。日本舞踊における譜は、近世になって『絵本踊づくし』（安永四年1775）があり、ここで座敷踊の簡単な図解がなされました。その後、『舞ひとり稽古』（文化十年1813）、『踊独稽古』（文化十二年1815）によって、連続した図に詞章と説明が加えられ踊りの記録とされました。これらの記録は、誰もが踊りの動きを感じとることができるものですが、いずれも舞踊譜以前の段階に止まったものといえます。幕末になると、初世西川鯉三郎（1823-1900）によって『伎楽踏舞譜』（嘉永七年1854）という譜が考案されました。ここでは歌舞伎舞踊の動きの述語が整備され、それまでの図解によるものから振りそのものに語句を当てはめ、それを体系化、ここから更に記号化され、西川流（名古屋）の秘伝書として名取弟子に与えられたと言われています。従って『伎楽踏舞譜』は舞踊譜でありながらも、伝書としての形で伝承されてきたという特徴をもっています。また、二世榎茂都扇性（1864-1907）によって初世扇性の創案の舞踊譜『手付』が補足され、榎茂都流の舞踊譜『型付』が完成されました。初世、二世の努力によって完成をみたこの舞踊譜は、従来の日本舞踊の型と動きを記録するにはほとんど完全なもので、榎茂都流の舞踊はすべてこの『型付』で記録されているということです。西川流（宗家）では、昭和十年（1935）に西川扇五郎（後の西川巳之助/1893-）が舞踊譜の必要性というものを感じて『舞踊譜』を発表しました。そしてこれに改良を加え発展させたものとして、昭和三十五年（1960）、東京国立文化財研究所から、『標準日本舞踊譜』が発表されました。これは三味線の文化譜に左右手足の四線譜を対応させて、動きの述語を拡充、体系化し、この四線譜に書き込むという

方法がとられています。以上、これまでに発表された舞踊譜というものを一渡り紹介しましたが、どれも実際的には現在、我々の社会の中で使われているものではありません。なかなか複雑すぎて理解が困難であるとか、実用性の面で若干無理があるという理由から使われていないというのが現状です。それでは現代社会に生きる日本舞踊家として、我々が現在どのような譜を使用しているかと申しますと、以前から存在する人体の略図を使った譜になります。参考までに、西川流（宗家）が門弟に振りの統一を試みる意味で配付している冊子に、『宝船』という、日本舞踊の稽古では初歩で習う短い舞踊の譜が載っています。〈資料1〉このような譜は、舞踊作品の覚え書きとして用いる為に舞踊家自身が描くものですから、自ずと個人差は生じますが非常に端的なものです。しかし日本舞踊の場合、昔から一対一（師匠と弟子）の稽古が基本とされていますから、これは古典芸能全般に通じることですが、よく先人の方が言われました「芸は盗むもの」であるとか「習うより慣れろ」という理念が根付いています。ですから理論的なことであるとか、書面によるものをあまり信用いたしません。それよりは寧ろ、師匠から見たものを弟子が自分自身で写すように努め、これを幾度もくり返すうちに覚え、いずれ己のものになる。こういうことが非常に重用視されています。従って、現在使われているような形態の譜というものは、我々日本舞踊家にとりまして、あくまでも忘れたときの覚え書きという存在です。即ち、創作活動において振付けを第三者に記述させる場合や、曖昧な箇所を確認するための一手段という程度に過ぎません。よって、これらの舞踊譜は舞踊作品を一応は習得していることを前提としており、プロの日本舞踊家であっても舞踊譜のみで舞踊作品を理解することは不可能ということになります。ですからこれら舞踊譜には略図や詞章に加えて、語句による説明書きが補足されています。

なお最近では舞踊の振りを保存する手段として、写真や映像が使われることも非常に多くなってまいりました。〈資料2「大和楽『あやめ』動作」〉これらはあくまでも振りを後々まで残すという資料性を意識しているに過ぎず、実践で主流となっているのは、あくまでも人体の略図による舞踊譜ということになります。現代社会においては写真や映像（ビデオ、CD-ROM）の普及が著しく、記録という意味で、振りの保存にこれらの手段を用いる場合も多く、寧ろ、そのようなものに段々と成り変わりつつあるということも現状です。しかしこのようなものを舞踊譜とはなかなか言いがたく、そこからは舞踊の動きを習得できるに止まり、舞踊の本質まで感じ取ることはできないでしょう。

振付者による振りの意味付けや感情というものは、決して映像を通して習得できるものではありませんから、それはあくまでも記録性というところに止まってしまいます。結局、最終的には、対人間であるということ、即ち、師匠から弟子に直に口伝するということがもっとも大切であると思います。ただ、人間の記憶というものは非常に不確かなものですから、これからの日本舞踊の正しい発展の為に舞踊譜は必要であり、実際に我々日本舞踊家も略図による舞踊譜を活用しているというこ

とが現状です。しかし日本舞踊においては、古典といわれる歌舞伎舞踊の場合に、舞踊的ななかにも演劇的要素(仕種)が振りのなかに多く含まれていることから、舞踊譜や映像による振りの保存では、なかなか伝承しきれないということも問題としてあり、このことは今後の課題です。以上、現代の日本舞踊家の立場といたしまして、舞踊譜の現状と私なりの解釈をまとめさせていただきました。(テープ起こしは石田久美子が担当しました。)

〈資料1〉人体の略図による舞踊譜
「宝船」

正面テ三ツスベリ四ツ目ニ 右ヲ一ツ踏ム・次ニ上手向 キニ座ル		右足カラ三歩前、左カラ 首ヲ三ツ振ル		二上リ 〜長き夜の
膝ヲ代エテ下向トナリ 扇ヲ握リモチ、左懐手 ヲシテ首		扇ヲ前ニ出シ乍ラ座リ 左ヒジ枕、上体ヲ二ツ ユスメリ、三ツ目開キ目 覚メル		〜遠の眼りの・皆目覚
扇半トデ乍ラ立テ逆 ニ持チ、左手握リ、 拡ゲテ首		立ツテ下手ヲサシ、右ヨリ 三歩、一度上ヲサシ廻ル		〜恵方に当る
扇ヲヒラキ乍ラ右廻リ、 両角モチ腹ノ前		扇ヲ開キ前ニカケテ 前ヲ向ク		〜弁天の
イヤ味ニ鉢ヲ左右ニ 振り乍ラ三歩前		中指ト人サン指ヲ扇ヲ 狭ク立テ上手ヲ見テ カクレル次ニソノ逆ヲ スル		合 〜笑顔に見とれて
		〜昆沙門さんのじやらつきを		
		〜根が生ぬきのえ		
		〜見かねて布袋が		
		〜のつきのさ		

〈資料2〉写真による舞踊譜
大和楽「あやめ」

合		右足前で顔は右ふり返って 目で次第に下手見る	前弾 さみだれに
トチチンツン		ゆっくり前向	匂う
トン		右手に傘持ちかえ	あやめ
トントンチャン かけ渡したる		左足ひき右手はなして、傘 左肩にかつき右手をえ左足 からゆっくり次ニ二歩上手へ 歩く	や
八つ		左袖 口附 左足引く	かきつばた

次第につぼめ 左足引く